

## 漫才台本 2

A「皆さんをなごませるために、一曲歌でもうたいましょう。」

B「いいねえ。歌は、場がなごむし、一体感が出るよな。」

A「では皆さんも一緒に歌える、童謡でもいかがでしょうか。」

B「いいねえ。どんな歌？」

A「さっちゃんですよ。」

B「あのかわいい歌だね。いいねえ、まずお前が歌ってみてよ。」

A「はい、まず私が歌いましょう。さっちゃんはね。よしこっていうんだほんとはね。だけどちっちゃんからじぶんのことみっちゃんってよぶんだよ。おかしいな、たっちゃん。」

B「何、わけのわからない歌うたってんだよ。おまえの方がおかしいよ。それに最後、男の子の名前になってるじゃねえか。」

A「せっかく歌ってやったのに、そんなひどいこと言うと、あなたのこと私のデス・ノートに書きますよ。」

B「デス・ノートって、映画にもなってヒットしたあの漫画か？そんなもん実際にあるわけないだろう。」

A「いいや、ここにある。じゃーん。これがデス・ノート。」

B「ほんとかよ。じゃ、書いてみろよ。」

A「いいんですね？死んでも知りませんよ？」

B「馬鹿言うな。」

A「いいですか、書きますよ。本当にいいんですね？」

B「はやく書けよ。」

A「では書きます。相方の名前は●●です。今日僕は相方と漫才をしているのです。漫才は難しいのです。それなのに相方は僕のことを怒るんです。こんなにひどい相方ですから、突然、舞台に穴があいて僕がそこに落ちるのです。」

A「もういいよ。語尾が「です」で終わってるから、デス・ノートだろう。」

B「ばれましたか？」

A「ばれましたかじゃねーよ。しかもお前が穴に落ちてどうするんだよ。」

A「落ちのある話で、おあとがよろしいようで。」

B「何、急に古典的になってんだよ。もうやってられねえよ。」

A・B「どーも、失礼しました。」